

こびもの詩コンクール応募作品資料

第三十三回

《熊本朝日放送賞》

父と母は漫才コンビ

高森町立高森東学園義務教育学校 九年

野尻 奈穂実

父と母は漫才コンビ

母がおどけて

父がツッコむ

そんなやり取りが日常茶飯事だ

時々二人は怖い顔をして

言い合いをする

でも最終的には

大声で笑い合っている

仲が良いのか悪いのか・・・

「結婚する人は

しっかりと見極めんといかんよ。」

母は私に言う

まるで自分ができなかったかのように

でも母は選んだ

いつでも笑顔にしてくれる父を

私は観客席で

二人を眺める

これから

どんな漫才が見れるのだろう

《坂村真民賞》

ちゅうちゅ

荒尾市立平井小学校 一年

伊藤 暖真

パパとおさんぽ

たのしいな

しぜんがいっぱい

はっぱもきれいだね

パパも

ほんとうだね

っていつて

ちようちよが

ひらり

ぼくは

ちようちよがすきになったよ

《親を大切にする

子どもを育てる会賞》

父ちゃんの肩車

熊本市立古町小学校 六年

濱田 諒真

小一のころ

父ちゃんは仕事に行く前に

肩車をしてくれた

ぼくが手伝いをしたときも

肩車をしてくれた

家の中で肩車をする

柱に当たりそうだった

でも父ちゃんの肩車は

たまらなく楽しかった

運動会の親子競技

五年ぶりの肩車

父ちゃんが下からぼくを抱えたとき

たおれそうでこわかった

父ちゃんはゴールに向かって走って行った

ぼくは父ちゃんの肩の上で笑った

父ちゃんの肩車は

やっぱり最高だ

《特別奨励賞》

すごいお母さん

熊本市立城東小学校 四年

皿田 龍

お母さんはかた手が使えない

けれどぼくにはできないことが

山ほどできる

りよう理はるんるん楽しそう

運転ブンブンかんたんそう

せんたく物はなんのその

あらいものもなんのその

パソコンうつのもへっちゃらさ

ぼくのお母さんはとてもすごい

でもゆいいつできないことがある

それは、はく手

でも大じょうぶ

お母さんは、はく手なくてもほめてくれる

ほめてくれるだけで

はく手されているのと一しよさ

「参考作品」

第一回《最優秀賞》

お母さん

黒石原養護学校中学部二年

藤本 猛夫

母さんは

にこにこして病棟にくる

やさしさが顔にあふれていて

ぼくは美しいと思う

ぼくの心はシャボン玉のようなはねている

母さんがいぐさの話をするとき

母さんのひとみは光っている

仕事にほこりをもっているんだらう

ぼくたちは散歩に行く

母さんはすいすいと車いすをおしてくれる

みなれた風景だけど

母さんがいると変わってしまう

時間がとぶように流れる

「じゃ またくっけんね」

ふりかえり ふりかえり

母さんは帰った

ぼくは小さい声で

「母さんのカッカレーはうまかったよ」と
言ってみた

第二回《特別賞》

宿題

熊本市弓削小学校六年

中村 良子

今日の宿題は つらかった。

今までで いちばんつらい宿題だった。

一行書いては なみだがあふれた。

一行書いては なみだが流れた。

「宿題は、お母さんの詩です。」

先生は そう言ってから

「良子さん。」

と 私を呼ばれた。

「つらい宿題だと思うけど

がんばって書いてきてね。

お母さんの思い出と

しっかり向き合ってみて。」

「お母さん」

と 一行書いたら

お母さんの笑った顔が浮かんた。

「お母さん」

と もうひとつ書いたら

ピンクのブラウスのお母さんが見えた。

「おかあさん」

と 言ってみたら

「りようこちゃん」

と お母さんの声がした。

「おかあさん」

と もういちど言ってみただけ

もう 何も 聞こえなかった。

がんばって がんばって

書いたけれど

お母さんの詩は できなかった。

一行書いては なみだがあふれた。

一行読んでは なみだが流れた。

今日の宿題は つらかった。

今までで いちばんつらい宿題だった。

でも

「お母さん」

と いっぱい書いて

お母さんに会えた。

「お母さん」

と いっぱい呼んで

お母さんと話せた。

宿題をしていた間

私にも お母さんがいた。

第二十四回

《親を大切にする

子どもを育てる会賞》

ぼくのミニトマト

熊本市立麻生田小学校二年

右田 翔大

学校でそだてた

ぼくのミニトマトが

まっ赤になった

やっと まっ赤になった

先生がくれた

ビニールぶくろに

ミニトマトを四つ入れて

ぼくのうちへ もってかえる

おかあさんが一つたべた

「おいしいね。」

と 言ってくれた

今日はパパのおべんとうに

ぼくのミニトマトが入っている

なんだか うれしくなってきた

こぞもの詩コンクール応募作品資料

第三十三回 《優秀賞》

ままがやきんのとき

宇土市立宇土小学校 一年

浅川 昊

ままがやきんのときさみしい
ごはんをたべるときさみしい
一ばんさみしいのはねるとき
ねるときはなかないように
ままのまくらをにおってるんだ
さみしいけど
ままおしごといいよ
おしごとがんばって
ままかえったらだっこしてね
ままだいすき

ふんわりおかあさん

宇土市立宇土小学校 二年

上谷 啓人

「けいと おきて。」
いつもおかあさんの声で目がさめる
ぼくがおきない
おかあさんもねころがって
ぎゆうとしてくれる

「あと十びよう。」

十びようたつても

ぼくはねたふりをする

おかあさんはふわふわ

この十びようが

ずっとつづけばいいのにな

お母さんと梨

菊池市立隈府小学校 三年

中津 遙馬

お母さんはいつも

梨を見るとわらっている

「あはは、あはは。」

つてわらっていたから

「どうしたの？」

つて聞いてみたら

「いつもより甘い梨だったから。」

とこたえた

だったら

そう言ってくればいいのに

と思った

けどどはずかしくて

言えなかった

「どうしたの。食べないの？」

と聞かれたから

「うん。食べない。」

と言った

だってお母さんの

幸せな顔を

ずっと見ていたかったから

お母さんの梨をほおばる

ニコニコした顔を

見ていたいから

お母さんは

やっぱり梨を見ると

わらっている

ぐうしてだらう

熊本市立託麻南小学校 四年

安永 れい

お父さんのたん生日

毎年あげる

プレゼント

いつまでも

ずっとずっと

車の中で

ほかんしている

わたしは

車にのるたんび

おりがみや

プラバンを見る

きず一つついていない

たいせつにしてくれている

しるし

どうしてすてないのだらう

わたしは

プレゼントを見るたんび

まどのそとを見て

なきそうになる

会いたかったよ

南関町立南関第一小学校 五年

坂本 瑠璃

お仕事で

ベトナムに行っている

お父さん

コロナで

なかなか会えなかったけど

夏休み二年半ぶりに

やっと会えるね

私大きくなったよ

びっくりするかな

会うのちよつとはずかしいけど

うれしいな

私が朝いい気持ちになれる理由

熊本市立城東小学校 六年

新山 リコ

「行ってきました。」
と手をふりかえす。

ママはどんな時でも起こしてくれる
ママはどんな時でもお見送りをしてくれる

朝からママと

けんかしたときだって

「行ったらっしーい。」

と笑顔で言ってくれる

私がまだおこってて

手をふり返さなかったときには

学校から帰ってくると

「りこちゃん。」

朝ばいばいしてくれなかったね。」

とちよっとおこって言ってくる

そして

「今度からママも

ばいばいってしないからね。」

ちよっとおこって言ってくる

だから、

「いやだ。」

と言うと

「じゃあちゃんも手をふってね。」

ちよっとにっこり言ってくる

だから

「はーい。」

と返事する

これが

私がいい気持ちになれる理由だ

「参考作品」

第二十四回

《親を大切にする

子どもを育てる会賞》

ぼくのミニトマト

熊本市立麻生田小学校二年

右田 翔大

学校でそだてた

ぼくのミニトマトが

まっ赤になった

やっとなまっ赤になった

先生がくれた

ビニールぶくろに

ミニトマトを四つ入れて

ぼくのうちへもってかえる

おかあさんが一つたべた

「おいしいね。」

と言ってくれた

今日はパパのおべんとうに

ぼくのミニトマトが入っている

なんだかうれしくなってきた

毎朝ママが私の部屋まで来て
カーテンとまどを開けると
「おはよう。りこちゃん。」
と言って電気をつけてくれる
だから私は
とてもいい気持ちで起きる
それから学校に行く準備をして
朝ごはんを食べて
歯みがきをして
学校に行く
でもただ
「行ってきました。」
と言って学校に行くだけじゃない
私が
「行ってきました。」
と言ってげんかんを出ると
ママも玄関から出てくる
そして階段の上から
「行ったらっしーい。」
と笑顔で大きく手をふってくれる
私と妹は下から

ぐずももの詩コンクール応募作品資料

第三十三回 《優秀賞》

ごめんって言えないけどあ りがとう

熊本市立出水中学校 一年

後藤 秀太朗

ついカッとなって
腹が立って
声を荒らげて
ひどいことを言う
後になって考えてみたら
しょうもないことだけど
意地張ってるのか
恥ずかしいのか
絶対に自分の口から
「ごめん」
とは言わない

いくら頑張っても
「ごめん」
って言おうとしても
心の中で響くばかりで
声にはでないし
もちろん気持ちは届かない

それでも少し経ったら

お母さんはご飯をつくってくれるし

お父さんは釣りに連れていってくれる

だから僕は勇気を出して

「ありがとう」

って言ってみた

そうしたら

お父さんとお母さんは

まるで

打ち合わせをしたかのように

同時に顔を見合わせて

にやけた

そんな顔を見ていると

僕まで

にやけてしまう

瞳の奥のやさしさ

学校法人文徳学園中学校 二年

眞鍋 亘

「もういいよ!」

母に言葉を吐き捨て家を出た

僕は朝起きるのが苦手だ

そのせいで母とケンカしてしまった

朝ご飯も食べられず気分が悪い

その日の授業も集中できなかった

でも何故か気分が悪さより

家を出るとき母の

眉をひそめているけれど目は心配そうな

そんな表情にモヤモヤしていた

そんな中重い足取りで家に帰ると

母は目を細めて

「おかえり!」

と言って出迎えてくれた

何も言わず笑顔で接してくれた母

ケンカをした自分が恥ずかしくなった

と同時にこの母の何気ない言葉に

少し嬉しさを感じた

「ただいま。」

小声で言った

母のようにうまく切りかえられないけど

人の気持ちを思いやれるように

少しずつ大人になっていくよ

働くお母さん

高森町立高森東学園義務教育学校 九年

古澤 正成

お母さんの働く量販店は

家から車で三十分以上

お母さん曰く

「お客さんと関わる仕事だけん

時々トラブルがあるとよ」

仕事が終わるのは

いつも夕方頃

帰ってくるとすぐに晩ごはんの準備

次に皿洗いや洗濯

仕事の帰りのせいだ

いつも顔色が悪く

深いため息をつくことが多い

やはり接客はストレスがかかる仕事

それでも毎日朝から夕方まで働く

休日にはいつもベッドに横たわり

溜まった疲れを取っている

寝るのはいつも夜中の0時

家事がたまると

余計に削られる時間

それでも嫌な顔をせず

毎日仕事に行っている

僕はそんなお母さんに

何もしてあげられていない

今は受験勉強で忙しいけれど

第一志望校に合格するという親孝行をしたい

高校に入学して落ち着いたら

できる限りお手伝いをして

少しでもお母さんを楽にさせてあげたい